

日本語研究の新視点

福田益和 著



福田益和著

日本語研究
新視点

江苏工业学院图书馆
藏书章

風間書房

著者略歴

福田 益和 (ふくだ よしかず)

1935年 8月 熊本県生

1962年 3月 九州大学大学院文学研究科修士課程 修了

現在 熊本県立大学文学部教授

専攻 国語学

著書・論文

共著『新しい国語学』朝倉書店(1988・5)

『愚管抄』の文章と語法管見

〔訓点語と訓点資料88〕(1992・3)

平成10年 3月20日 印刷

平成10年 3月31日 発行

(検印省略)

日本語研究の新視点

定価(本体一九〇〇〇円十税)

著者 福田 益和

発行者 風 間 務

印刷者 渡 辺 英 昭

発行所

株式会社 風 間 書 房

101-0051 東京都千代田区神田神保町一の三四

振替 〇〇一〇一〇一五一一八五三番
電話 〇三(三二九一)五七二九番

(千代田オフセット・矢嶋製本)

ISBN4-7599-1091-3

目 次

第一章 日本と中国	一
-----------	---

——中国資料による日本語研究など——

(一) 『吾妻鏡補』所引「海外奇談国語解」本文の構成と語彙	三
(二) 岡嶋冠山編「唐話纂要」本文覚え書き	二五
(三) 方言資料としての『唐話纂要』	四七

——長崎方言の形成——

(四) 中国資料『日本考』研究序説	六四
(五) 『日本考』——本文と語彙——	七九
(六) 『日本考』小考——巻四を中心に——	九四

第二章 作品とその言語研究	二三
---------------	----

(一) 日本書紀私記(甲本)	一五
(1) 日本書紀私記(甲本)について	二五
(2) 日本書紀私記甲本における傍訓の性格について	四二

(3)	日本書紀私記（甲本）について……………	一六二
	——傍訓の仮名の用法を中心に——	
(二)	徒然草……………	一八〇
(1)	徒然草七三段の解釈……………	一八〇
	——「はなのほとおこめきていふは」——	
(2)	兼好とコトバ……………	一九九
(3)	兼好の言語生活一面……………	二二六
(三)	古今著聞集……………	二三〇
(1)	古今著聞集研究序説……………	二三〇
(2)	「古今著聞集」小考——名義をめぐって——……………	二四七
(3)	古今著聞集の表現に関する一考察……………	二六四
	——今昔物語集・宇治拾遺物語との比較を通して——	
(4)	古今著聞集の研究……………	二八五
	——助詞「の」「が」の用法——	
(5)	古今著聞集の研究……………	三三二
	——古今著聞集と徒然草——	
(6)	古今著聞集の研究……………	三七五
	——語彙・語法雑考——	

第三章	日本とインドネシア	……………	五九六(一)
	—— 対照研究・日本語溯源など ——		
(一)	インドネシアにおける言語行動の実態調査報告(概要)	……………	五九四(三)
	—— 日・独と比較して ——		
	(1) 日本語文		
	(2) インドネシア語文		
(付)	インドネシア人用言語行動調査票(インドネシア語文)	……………	四〇八(四九)
(二)	日本語における南島語的要素	……………	四二六(七二)
(三)	ポリワノフ覚え書	……………	四〇九(一八八)
(四)	エマン先生訪問記	……………	四〇四(一九三)
	—— インドネシアの日本語教育 ——		
(五)	近代日本文学における「日本語」	……………	五九七
あとがき	……………		

第一章

日本と中国

——中国資料による日本語研究など——

(一)『吾妻鏡補』所引「海外奇談国語解」本文の構成と語彙

一

いわゆる中国資料と目される『吾妻鏡補』所引の日本語彙については渡辺三男氏、大友信一・木村晟両氏、萩原義雄氏の研究、近くは高山倫明氏の研究等⁽¹⁾があつて、国語史の立場からも注目されるようになった。本稿はこれ等先学諸氏の論考に啓発され、「国語解」本文を閲覧しているうちに気がついた若干の事項について考察を加えたものである。

中国清朝の儒学者翁広平（字は海琛、海村と号す）の撰になる『吾妻鏡補』は、わが国（日本国）の『吾妻鏡』に触れる機会を得た彼がその中に記された史実の一つ一つに興味をそそられ、この書を土台にして広く日本全般に対して知識を集めようとして成ったものである。当代有数の日本学者として知られる翁広平に該書のあるのは当然といふべきで、またその意味においても彼の記述の内容と態度が注目されるのである。当時（一九世紀初）外国に門戸を閉ざしていた日本側の情報是中国でも収集に限度があり、全体的にみてもかなりの誤りを内包しているようであるが、唯一の窓口「長崎」の地を経由して伝えられた文献もかなりあつたようで、それ等の一部が『吾妻鏡補』にも引用されている（渡辺氏によると、⁽²⁾引用一九二種、うち日本人の編著刊刻になるもの四〇種に及ぶ、との由）。これによつても翁広平の

日本研究への意欲がうかがわれるようである。

『吾妻鏡補』全体の構成は、

序文・世系表・地里志・風土志・食貨志・通商条規・職官志・芸文志・国書・国語解・兵事・附庸国志・雑記となつて居り、それ等を三〇卷（または二八卷）に配している体裁となつている。他の日本研究の諸書（日本考略・日本風土記・日本一鑑など）に比して遜色のないものと評価される。本書は、中国の北京図書館に一本が蔵されている由、わが国では、静嘉堂文庫と駒澤大学図書館にそれぞれ一本（写本）が蔵されている。北京図書館所蔵本と駒澤大学図書館所蔵本（以下駒本と略称することあり）は二八巻本、静嘉堂文庫所蔵本（以下、静本と略称することあり）は三〇巻本で巻数を異にしている。静本と駒本との関係については、本文の欠損の状態からして駒本は静本を直接にあるいはその系統本を書写したものと考えられている⁽³⁾。以下、本稿では静本を基準にして考察することにする。

二

「国語解」は内容から見て「日本語彙集」であり、駒本では卷二六、静本では卷二七・二八にそれぞれ収められている。静本によってその大要を示すと、

○卷二七 国語解一

天文時令類98 地理類17 身体類93 人物類93 禽獸蟲魚類61 花木類60 食物類57

（計479項目）

○卷二八 国語解二

衣服類56 房屋類19 船中器用類154 数目類22 人事類154 俗語類69 通信類105

（計579項目）

州名島名類81 長崎名84

（計165項目）

〈算用数字は標出項目数を示す〉

以上の通りである。各々、意義分類の標目は「――類」の名称で統一せられ（付加と考えられる「長崎名」には「類」字が見えない）、巻二七、巻二八それぞれ七類に分けられている。

標出の語彙項目について意義分類を施して全体に配する方法は中国では古くからの伝統があり（古辞書『爾雅』・『広雅』などの部門による配列、後世の類書の配列など）、わが国の『和名抄』等にも影響を与えたものであるが、『国語解』の意義分類による配列方法もそれ等の伝統的な配列方法に依拠しているものと考えられる。ただ、その分類の基準が直接どのような書に依拠しているかは必ずしも定かであるとはいえない。

巻二七の冒頭に、「国語解」^{本海外奇談}と注記があり、巻二八の「州名島名類」の下にも「国語解本日本図纂参海防類考」、同巻「長崎（町）名」の下に、「本東洋客遊略」と各々注記が見られる。これ等の注記の中に見える「海外奇談」・「日本図纂」・「海防類考」・「東洋客遊略」等の書は、翁広平が「国語解」を編むにあたって依拠・参看したものと考えられる。その中で、「海外奇談」は巻二七の「天文時令類」から巻二八の「通用類」までにわたっての依拠本と考えられるから、それに従えば「海外奇談」の意義分類がそのまま『吾妻鏡補』の「国語解」にも踏襲されたものとも推測されるが、その「海外奇談」なるものがどのような書であるか不明であるため具体的に内容を検討することができないのは残念である。しかし、日本語彙を多数収録していたと推測される「海外奇談」も日本研究の書であったと思われるので、標出語彙項目についての意義分類が施されていたとみるのが穏当であろう。そうだとすれば、「国語解」の意義標目である所の、

天文時令類 地理類 身体類 人物類

等々の一四類は「海外奇談」によったものと考えられるのである。

ところで、これ等の意義標目の性格を知るために、『華夷訳語』の一つである『日本館訳語』（一四九二―一五四九頃の成立）と比較してみよう。同書は全体を一八門に分類している。その意義標目は次の通り、

天文門 地理門 時令門 花木門 鳥獸門 宮室門 器用門 人物門 人事門 身体門 衣服門 飲食門 珍宝門 文史門 声色門 数目門 方隅門 通用門

右の一八門を『吾妻鏡補』の「国語解」と比較対照してみると、

地理 身体 人物 花木 衣服 数目 人事 通用

の八つについては一致し（標目の次第については除外して考える）、「国語解」の「天文時令」は『日本館訳語』では「天文」と「時令」の二類に分けられ、同様に「禽獸蟲魚」は「鳥獸」、「食物」は「飲食」、「房屋」は「宮室」、「船中器用」は「器用」と若干その名称がことなっている。また「国語解」の「俗語類」に対応する『日本館訳語』の標目はなく、逆に、「国語解」にない「珍宝」・「文史」・「声色」・「方隅」等の標目が『日本館訳語』にはある。

以上の考察よりして、「国語解」の一四類の意義標目のうち、半分の八類は『日本館訳語』のそれに一致し、残りの五類は意義標目相互に若干異同は認められるが対応する標目があるので、これ等をあわせた一三類は両書ほぼ同様な意義分類が施されていることになる。「俗語類」一つについては対応するものがないが、この中には日本語彙のうち、俗語・方言色のつよい語が収められているから、ここに「国語解」の個性を認めうるとも判断される。なお、華夷訳語のうち『朝鮮館訳語』（二九門）・『琉球館訳語』（一五門）についても一言すれば、全体として『日本館訳語』の意義標目によく対応する。異同を言えば、『朝鮮館訳語』では「天文門」から「衣服門」の一一門については標目名・順序とも全く一致し、「声色・珍宝・飲食・文史」の四門については標目名は同じだが順序に前後の乱れがあり、他に「干支門」・「封名門」という『日本館訳語』に見えないものがある。

一方、『琉球館訳語』では、「天文門」から「人事門」の九門については標目名・順序とも全く一致し、「衣服・飲食・身体」の三門については標目名は同じだが順序に前後の乱れがあり、『日本館訳語』の「文史・声門・方陽」の三門は『琉球館訳語』では欠けている。このように『日本館訳語』をはじめとする「華夷訳語」の意義標目は「国語解」のそれによく似ているように思われる。とすれば、内容の明らかでない「海外奇談」もこれ等と同類の書と推察することができる。すなわち、当時の中国人によって採用された意義分類の基準のうちの一つに則った配列方式によって日本語彙を集めたものを内包した日本研究の書と考えられる。

三

ところで、「国語解」の意義標目が「天文時令」のように「天文」と「時令」とを合して一類としたごとく、その意義分類の態度は統括的で細分化の方向は認められない。これを、侯継高の『全浙兵制』付録の『日本風土記』とも深くかわる『日本考』⁽⁴⁾（明代・万暦年間一五七三―一六二〇、李言恭・郝杰の撰）と比較してみることにする。

『日本考』全五巻。巻一は、倭国事略・畿内部・駅……、巻二は、沿革・疆域・畿州郡島……、巻三は、字書・以路法四十八字様、歌謡、巻四は、語音・天文・時令……、巻五は、文辞・詩賦・山歌……と次第されているが、今問題としたいのは巻四の、意義分類の施されたところである。

初めに、「語音 切音正舌歌」として発音に関する記述があり、以下、意義分類によって配列されている。各々の意義標目には、標出漢字の下に音訳漢字・ひらがなが注記されて居り、国語史上注目される部分である。その意義分類の標目を次に示す。

天文 時令 寒温 晝夜 月分 日数 今明 五行 十干 十二支 六十甲子 地理 火炭 宮室 城市 国部

方向 人物 君臣 吏従 軍民 教流 工芸 流賤 篤廢 親属 称答 身体 衣服 鋪盖 段布 顔色 五穀 飲食 調和 炊煮 数目 算法 器用 内器 匠器 農具 船具 馬具 文器 武器 响器 香料 医用珍宝 花木 菓子 菜蔬 野草 鳥獸類 人事類

全五六類（各標目には、類または門の字を欠くが、鳥獸・人事の二項については類の字があるので便宜上「――類」とした）、その意義分類の方針は、先の「国語解」や「日本館訳語」等のそれと比較すると細分化の方向をもっていることがわかる。

例えば、「国語解」の「天文時令類」所収の語彙項目九八項について、これ等に対応する「日本考」の語彙項目の所属する意義標目を対照させると次の通りである。（上段の算用数字は、注（1）大友・大村両氏の「国語解本文と索引」の通し番号。下段は「日本考」巻四の意義標目）。

1 16	天文	54 56	今明
17 26	十干	57 72	月分
27 38	十二支	73 84	日数
39 42	方向	85 93	今明
43 53	時令	94 98	晝夜

「国語解」の二類（天文時令類）に対して、「日本考」では九類にわたっていることがわかる（「今明」は分断され、二ヶ所に配されている体裁である）。また、「国語解」の「人物類」について同じく「日本考」の標目について対照すると、人物 君臣 吏従 軍民 教流 工芸 流賤 篤廢 親属 称答の二〇類にわたっているのである。

これ等の両書比較対照の結果からみても、『日本考』の意義分類は統括的ではなく細分化されたものであるということが出来る。

また、標出漢字・音訳漢字の掲げ方にしても、「国語解」は『日本考』に比して斉一的であるとは言えない。例えば、「国語解」の「天文時令類」は、

1 天 天道(テントウ)⁽⁵⁾ 2 晴 天几要加(テンキヨカ) 3 日⁽⁵⁾ 倭子山馬(オヒ)
業叔古(ニッショク)(中略)……14 電 衣那司馬(イナズマ) 15 雨 措迷夫羅(アメフル)……
4 日晒 忽迷(速)(ホス) 5 日食

と配されているが、標出漢字が一字のもの(1 2 3 14 15 など)・二字のもの(4 5 など)が混在して居り、音訳漢字の部
分も、物の名(体言)をあらわすもの(3 14)、動作を示すもの(4 15)、その他が混在して配されている。一方、『日
本考』では「天文」の部分眺めると、

天 日 月 星……(中略)……氷

と、まず漢字一時を標出して配し、その次に

天晴 天陰 雨下 雪下 風起 風息

と、漢字二字を標出し、それに付された音訳漢字も句レベルのものとなっている。例えば

雨下 挨迷付魯(あめふる)⁽⁶⁾ 風起 革熱拂古(かせふく)

「国語解」に比して『日本考』の標出漢字及び音訳漢字の掲げ方は整理がなされていると考えられる。

以上の考察からして、『吾妻鏡補』所収「国語解」(「海外奇談」に依拠したもの)の意義分類の態度は『日本考』のよ
うな細目主義を採らず、『日本館訳語』等に見られるような統括的な標目を設定するところにその特色を見ることが
できる。標出語彙項目の配列方法にしても斉一的ではなく未整理の印象を与えるのである。

四

「国語解」の依拠した「海外奇談」なる書については具体的に明らかでないが、既述のごとく意義標目の一つに「俗語類」を設けていて、通俗的・口語的語彙を収集しようとする意図が見られる。これ等の語彙は、「俗語類」以外のところにも見られるのであって、後述するごとく肥筑方言、中で長崎方言の性格を帯びていると思われる。「国語解」の依拠した「海外奇談」の「奇談」という語も所収語彙の性格を反映したものであるうか。「身体類」所収の語彙の中には性器・性行為をあらわす卑語も含まれていて注目される。これ等の語彙にあたつて、長崎の地役人（唐通事あたり）が関与した可能性が高いとされる高山氏の説は⁽⁷⁾当を得ていると思う。

渡辺三男氏他、既に先学の指摘される如く、当時世界に門戸を開いていた日本唯一の地「長崎」を印象づける分類標目・語彙項目が目につく。

まず、卷二八「国語解二」の標目「通用類」の後に「州名島名類」をあげ、その次に特に「長崎名 本東洋客遊略」として長崎の町名を列挙していること（140-123）、地里類の中に「115長崎 南加沙几（ナガサキ）」を標出して見出しとしていること、人物類の中に「281高木公 撒戈夜門（サクエモン）」、「284通事 知自（ツウズ）」、「288唐人 拖人（トゥジン）」等長崎に深くかわる人物が標出されていること、房屋類の中に「544会館 那格篩几快手（ナガサキカイシヨ）」、「547唐人公館 妥人押式吉寿前時（トゥジンヤシキジウゼンジ）」、「548公堂上去 子字非雅一過（ツウズヘヤイコ）」、「553貸庫 新地（シンチ）」等、長崎の地を明示するものが配列されていること、等々である。『吾妻鏡補』の撰者翁広平も、日本長崎の地における日中貿易の重要性を認め、それ等に関する語彙を多数収めている「海外奇談」なる書を「国語解」の典拠としたものであらうと推察される。

「本東洋客遊略」と注記する長崎の町名については、「右内二十六條街」と後注して内町二六町をまずあげ、次に、「右外三十九條街」と「右郷下十五條街」とを各々後注して外町五四町、それに丸山町・寄合町他の遊女町を補記する体裁となっている。

「右内二十六條街」として配する

1140 大村町 1141 内中町 1142 船津町……(中略)……1164 金屋町 1165 堀町(音訳漢字等は略す)については、一六七六(延宝四)年頃の内町二六町の町名に一致する。一方、外町に該当する「右外三十九條街」と「右郷下十五條街」について言えば、一六八〇(延宝八)年、町名改称された「伊勢町」(新高麗町)を、「八幡町」(新紙屋町)を含んでいるからそれ以後の町名を反映することは明らかである。そしてこれ等は、天和元(一六八一)年の外町に一致する。ただ、「本鍛冶屋町」は、延宝六(一六七八)年に、「万屋町」となったが、両者とも併記されて居り(1194と1196)、また、「本大工町」の旧称「大工町」が、両者とも併記されている。(1186と1189)。この点からすれば、町名の標出・配列の上で未整理の印象は否めない。

一方、町名の下に注記された音訳漢字に注意すると、

1150 本下町 本獨失達馬市(モトシタマチ)

1158 本博多町 木獨百家打馬市(モトハカタマチ)

1162 本興善町 豊柯前馬市(ホンコウゼンマチ)

1163 本五島町 豊五島馬市(ホンゴトウマチ)

とあって、町名「本」について、「モト」・「ホン」の訓みが混在している。明和四(一七七七)年に、「本」の町名については、すべて「モト」と呼称するように奉行の命令が出されているから、それによれば右の町名のよ